

銅劍銅鉞に就いて (四)

梅原末治

九

銅鉞銅劍發見の遺跡として上述の甕棺と共に注意に上る他の一は箱式棺である。これは嘗て一部學者の間に阿波式石棺なる名稱を以て呼ばれ、近頃又粗製組合せ式石棺とも稱せられてゐるもの。其の特色は數個の板石を並べ立て、長方形の區劃を作り、上部を同じ平石で覆ふた *box* で、古墳内の石の架構物としては最も簡單な類に屬してゐる。此の種の遺跡で劍鉞の出た確かなものに

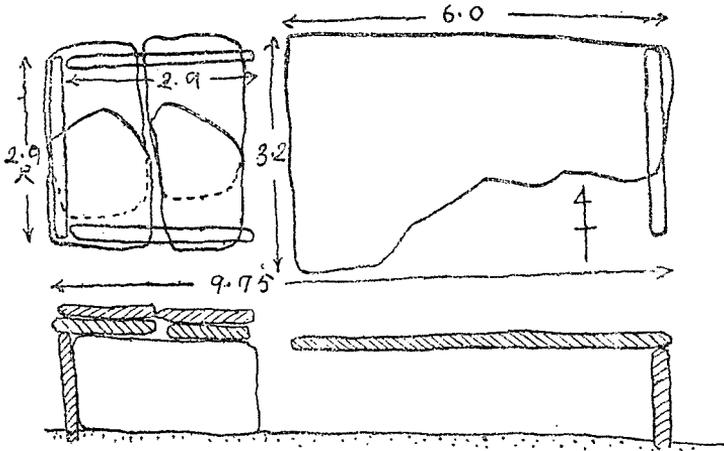
- 一、對馬國上縣郡佐護の遺跡(廣鋒銅鉞)
- 一、同 國同 郡白岳遺跡(細形銅劍)
- 一、肥前國東松浦郡柏崎(狹鋒銅鉞、異形劍)

- 一、同 國同 郡谷口(?)の遺跡(タリス形銅劍)
- 一、豐前國宇佐郡ベウモリ塚(銅鉞)
- 一、豐後國西國東郡美和(クリス形廣鋒劍)
- 一、筑前國絲島郡前原村泊(細形銅劍)
- 一、筑後國三潯郡塚崎西畑の一遺跡(細形銅劍)
- 一、長門國豐浦郡富任(細形銅劍)
- 一、伊豫國宇摩郡妻鳥の遺跡(銅鉞)
- 一、朝鮮忠清北道牙山屯浦面遺跡(細形銅劍、狹鋒銅鉞)

の十一ヶ所を數へることが出来る。中に就いて其の構造の割合に明瞭な四五を擧げると、先づ細形銅劍二口を存した長門富任の遺跡は、當時の地方廳の届書に依ると、棺は地下約二尺にあつて平板石六枚を並べ立て、周劃を作り、其の内部には同

數の平石を敷いて底の固めとし、二枚の大石を以て上部を被ふたもので、大さは豎六尺横二尺一寸

第六圖



對馬佐談遺跡復原圖

高さ一尺五寸あつて、棺内には劍と共に三鈕の蒲鉾縁細紋鏡や彌生式の壺數個が存した。是等の遺物の配列は棺の長軸に沿ふた兩側に劍が置かれてあり、一端に鏡、他方に壺の類が存したものでらしい。對馬の佐談の棺は大正十年の發見に係つて、廣鋒銅鉾四口と共に銅製の壺と、漢式、彌生式、陶質の三種の土器等が見出されたことに依り、學者の興味を惹いたが、其の構造は後藤守一君の實査の結果、遺跡は既掘の形跡があつて原形を確め難い部分もある様に見ゆるが、大體に於いて此の系統の架構で、發掘當初の状態は第六圖の如きものであつたことが知られた。即ち大さは豎十尺に近いが箱式棺としての特徴を具へたものと認めてよい。(一) 豊前のベウモリの遺跡は川の岸に近い臺地上に營まれた圓墳で、地は川上神社の境内に接し、今もなほ封土の一部分を存してゐる。南善吉君に従ふと棺は板狀安山岩を組合せたもので、

内部から鐵劍及び彌生式土器と共に銅鉞が見出されたのであると云ふ。河野清實氏の調査した豊後美和の遺跡の棺またこれと相似たもので、同じ石材を組合せ、身は堅五六尺、幅二三尺の南北に長い形をして、天井石は二枚から成つてゐた。そして内部の南方にクロス形廣鋒銅劍が埋葬されてゐた。

以上の外筑後塚崎西畑の一遺跡は同じ棺が主躰で、劍はその上邊から發見せられたと云ひ、(二)筑前の泊と、伊豫の妻鳥との兩遺跡は高橋健自氏の調査の結果共に箱式棺を主躰としたものであることが知られ、特に前者は内面に朱を塗沫してゐた事實をも確められたし、(三)朝鮮牙山屯浦面の遺跡は今ま出土の劍鉞を藏する大和與次郎氏の談に依るにやはり同じ式の棺の内部から土器など、共に出たと認めらるゝ。なほ對馬國の白岳の場合は遺跡が一種の積石塚群で、銅劍がその何れの塚

から出たのかを確め難いが、何れもが箱式棺を埋めた堅穴式石室を主躰とするものゝ様なので、(一)また同じ類に加ふべく、これは特殊の小銅劍を出した讃岐の猫塚の積石塚にやゝ似た構造のものも見らるゝ。但し後者の主躰は箱式棺ではなくて横穴式石室であるのを著しい相違と云はなければならぬ。

さて是等の諸例からして、銅鉞銅劍の行はれた時期中に、其の民衆の間には死者を葬るに當つて上述の甕棺とは別な此の種構造の墳壟が營まれてゐたことが知られるし、また其の遺跡の分布が朝鮮から四國中國にまで及んで、甕棺のそれよりも範圍が廣く、且つ副葬の鉞劍の形式も平形を除いた他のすべてに互つて、鉞劍との關係が一層密接なことが窺はるゝ次第である。然らば箱式棺と問題の銅劍銅鉞とは如何なる交渉を保つて居り、また甕棺に對して持つそれ自らの性質と遺跡として

の占むる位置とはどうであらうか。これはまさに次に考察すべき點と思ふ。そしてやゝ岐路に入るの感はあるが廣く我が國土に於ける箱式棺の分布から記載を進むるのが順序であらう。

從來學界に提供せられてゐる資料に本くと、此種の構造を主躰とする墳墓は、單の上に擧げた鍔劍を出す特殊な十數例に限つたわけでなく、我が上代の高塚には數多く存するもので、其の範圍また西は九州から中國、四國、近畿、本州中部に及んで、營造の時代また甚だ古いと認めらるゝものから比較的後の時期にまでも行はれたことが略ぼ明になつてゐる。今ま其の四五の例を擧げるならば、九州では、漢式鏡二面や銅鏃を出した筑前早良郡五島山の古墳が立派な箱式棺を主躰としたものなのを初め、(四)同式棺を二重に作つた壹岐の武生水村郷ノ浦の一古墳。内面に彫刻のある肥後天草島の箱式棺、(五)豊後の西國東郡田原村

灰土山の古墳、(六)豊前國宇佐郡宇佐の赤塚古墳等は其の著しい二三の例である。なほ喜田博士に依ると大隅唐仁の大塚神社の古墳には前方部に箱式棺を陪葬したものと云ひ、山崎五十麿君が石器と彌生式土器等を見出す古墳として報告してゐる薩摩國薩摩郡東水引村大字五代及び隈之城村大字宮里の兩遺跡共にまた箱式棺の系統に入るべきものと見ゆる。(七)中國方面では隱岐の島前や、因幡岩美郡宇倍山等に代表的な例があるし、丹後熊野郡函石濱の遺跡から見出された棺は内に割合に時代の降る陶質器を壓めてあつたので注意すべく、(八)伯耆東郷池附近に散在の露出の石室また同じ式を擴大したに過ぎないものと思ふ。四國の方面では阿波に最も濃厚な分布を示すことは嚮に笠井新也氏がこれに阿波式石棺なる名稱を以てして、恰もこれを同國古墳の特質の如く論じたことが最も雄辯に物語つてゐるから、こゝに例證

を擧げるの要はなからう。(九) 讃岐圓座村發見の一種の甕棺の外廓が組合せの箱式であつたのは既に指摘した如くである。近畿に於いては紀伊の岩橋の千塚群に同種の顯著な例を見ることは和歌山縣史蹟調査報告に詳しく載せてある處で、大和の山邊郡朝和村大字竹之内古墳の棺は組合せの整美な一例として擧ぐべく、(一〇) 同吉野郡大淀村大字北六田(一一) 攝津國三島郡福井村海北塚の(一二) 二者は共に箱式棺が横穴式石室内に置かれたもの其他昨年發見に係る和泉國泉南郡多奈川村の一古墳また同じ例に入るべきで、この種の例を擧げれば際限がない。

眼を轉じて韓半島に於ける同種遺跡の分布如何を見んか私は先づ古の伽羅の一中心であつた慶尙北道の高靈に其の好例の存在を指摘し得るし、(一三) 前年鳥居博士が發掘調査を試みられた忠清南道扶餘の磨石劍、磨石鏃を副葬した古墳の一團

また同じ構造から成つてゐたと云ひ、大正五年に關野博士一行の學術調査を経て高句麗代の墳墓と認められた平安南道龍岡郡黃山南麓古墳郡の石室が此の系統に屬する事も特記すべきであらう。更に滿洲方面にも此の形式に包括せられる古墳は遼陽や柞木城の附近に存在してゐるのが鳥居博士其他の學者の調査に依つて知られて居り、北支那の房山縣南の路側に同じ棺のあることが最近今西博士の調査で明となつて、其の概要が考古學雜誌(一三ノ九)に載つてゐる。

一體箱式棺なるものは其の形頗る簡單であるから、遺骸を葬るに或空間を必要とし、數個の石を以て是れを作らうとすれば何人も考へつく處のものなのは言を俟たない。されば同じ箱式棺が古くスイスの史前代の遺跡にその好例を存し、また同じ系統に入るべき造構物が、相似た狹義のドルメンと共に世界各地に散在してゐることは故あるこ

とで、單にこれがあるからと云ふて直ちに相互の連絡などを云ひ得るものではない。然しながら上來述べて來た箱式棺と初に擧げた鉾劍の出たそれとに於いては、兩者が全く同一系統に屬すべきことは遺跡の實際から恐らく何人も否定し得ないであらう。従つてまたこゝに考察の對象としてゐる遺物が出る箱式棺は要するに支那から内地にまで廣く分布した其の一に外ならない事になる。箱式棺は此の點に於いて甕棺よりは遙かに鉾劍との關係が密接で、またその我が國に傳へられた徑路とも一致して興味が深い。そして右の關係を更に價値づけるものは上來擧げた遺跡の年代の示す事實であると考へる。箱式棺の年代を詳述することは本論の目的でないから今まは概括にとゞめるが、内地に於ける高塚の主躰をなす同式棺は例へば豊前宇佐赤塚古墳の様に大形の三角縁神獸鏡を出して、其の三國前後の營造たる徵證のあるのが存し

(二四) また山崎君報告の薩摩の例の如きも果して石器と彌生式土器とが發見せられたとすると、地理的位置に對する考慮の要は勿論ながら、同じく古い時代のものとなせなければならぬ。然し全體から見て、内地に廣く分布するのは寧ろそんな古式のものよりも大部分は六朝中期若しくは以後と認むべき時期に屬し、彼の陶質の蓋坏を出した丹後の函石の一棺や、金環を副葬した大和竹之内のもの、斧頭其他二三の鐵器のみ存した豊後八阪村(二五)の古墳の如きは後者の例と云ふべく、同種の例は鮮くない。朝鮮の遺跡については北方平安南道龍岡のものが關野博士が認めて高句麗代とせられ、南の高靈の棺は私共の調査の結果伽羅の比較的後のものと想定したのであるから、兩者は大體内地の高塚と時期を一にするが、扶餘の棺に至つては鳥居博士は之を以て石器時代の墳墓なりとの見解を持つてゐらるゝ様であるし、傳へ聞く處

に依れば同じ例は石劍石鏃出土の際時々遭遇するものであると云ふ。私は發見の磨石劍を以て後に述べる如く銅鉞銅劍が石器製作の上に與へた一の表はれと解しこれを金石併用期のものと、認めたのであるから、博士の高見とは一致せないが、右の想定から銅鉞銅劍と相近い時代に置くべく、やはり時代の遡る古いものとの歸結には到達するとして支石塚またその一類に加ふるのを穩當なのを信じたい（二六）滿洲や支那の遺跡に就いては私是不幸にしてそれを論證する何等の資料を持たないが前者が漢代のものであるとは學者の説く處である。

以上の見解にして大なる誤りが無いとすれば、後に對する引續きはあるが、大體滿洲から朝鮮九州本州中部と年代を追ふて擴がり、鉞劍を出す箱式棺が同種の遺跡中時代の古い初の部分に相當るものだと云ひ得るやうである。

して見れば後の我が高塚に多い箱式棺は當然鉞劍を藏したその流れを受けたと解せられて結びがつくが、遡つて然らば箱式棺の本く處果して何れにあるだらうかの問題になると、私の支那や滿蒙さては西伯利亞の方面に於ける關係の知識の絶無から推論を進めるの可能性がある。上擧の分布其他の記述からすると一見箱式棺は鉞劍と共に大陸から傳へられたものゝ如くにも見ゆるが、本來の漢代の墳墓が磚築若しくは木槨であつたらしいことが南滿洲や北朝鮮の考古學上の調査の結果略ぼ明になり、現に平安南道大同郡東大院里の古式細形銅劍出土の遺跡が、同式に屬するものゝやうであるから、これは今ま輕々に斷じ難く、寧ろそれを否定するのが適當かも知れない。たゞ試みに憶測を加ふるならば、この箱式棺なるものが北の方から半島を経て島國に來た民衆に密接な關係のある墓制で、分布の地理的位置から早く銅鉞銅劍と

の間に交渉を生じ、鉾劍廢されて後もながく我が高塚に系統をとりめたものとも見るべきであらう。

最後に鉾劍を廢めた箱式棺が後の我が高塚に多く見ること、關聯して、其の實年代の上から別途に考察を要するのは、畿内で發達したと認むべき前方後圓墳との交渉の有無如何で、これがまた間接に銅鉾銅劍と銅鐸との文化關係を窺ふ資料となることも考へられる。我が前方後圓墳は前者の行はれた時代と相前後して其の萌芽を發し、西暦二三世紀に至つて特殊な外形を完成するに至つたが、而も其の内容に於いては頗る單純な構造で、礫石や粘土、木材等を用ひて遺骸を覆ふに過ぎなかつた。所が外形の完美と共に礫石を積んだ不整な室が出來、それが發達して平面が箱式棺と同一な所謂堅穴式石室を形成する様になつて、此の特殊の墓制を四方に傳播し、六朝中期に至つて整美の頂

點に達した。それと同時にまた組合せ棺から種々の壯麗な特殊の棺が作られて、それが同時にまた主躰の一を占めてゐるのが知られる。この變遷は大體の上から見て、支那の高い文化を受け早く銅鐸を作つた民衆が引續いた其の漢代の影響の下に開展した彼等特自のもので、堅穴式石室また一人を葬る空間として當然到達すべき構造ではあるが此の文化が早く銅鉾銅劍の表徴するそれと接觸し、遂にこれを包括したものであつて見れば、西方に早く存した箱式棺が前者の内部構造の發達と特殊の石棺の發生とに全然無關係であつたとは何人がこれを主張し得やうか。私は現在の知見から我が前方後圓墳の内部構造の完成に箱式棺の及ぼした影響を是認するもので、同時にまたこれが大和朝廷の成立に對する、九州に早く現はれた銅鉾銅劍のそのの間接の一貢獻とでも解すべきものと私に考ふる一人である。なほこの事は後段に於

いて再び論及する機會があらう。

【註】【一】 後藤守一君「對馬瞥見録」(一)(考古學雜誌一三ノ二所載)

【二】 諸陵寮藏六村中彦氏調査

【三】 高橋健自氏「銅鏃銅劍考」(前出)第三回

【四】 中山博士「九州北部に於ける先史原史兩代中間期間の遺物に就て」(四)(考古學雜誌八ノ三)

【五】 京都帝國大學考古學研究報告書第一、三兩冊

參照

【六】 河野清實君「豊後西國東郡出原村灰土山の古墳」(考古學雜誌五ノ一一)

【七】 山崎五十麿君「薩摩國薩摩郡に於ける原始的古墳に就て」(同誌九ノ九)

【八】 京都府史蹟勝地調査會報告第三冊

【九】 考古學雜誌第四卷第四號に載せた笠井君の

「阿波國古墳概説」及び同誌第五卷で喜田博士との間に交へた阿波式石棺に關する論争の文を參照のこゝ

【十】 奈良縣史蹟勝地調査會報告書第七回所載佐藤文學士報告參照

【十一】 同 報告書第六回 高橋健自氏報告參照

【十二】 梅原「塚原の群集墳と福井の海北塚」(考古學雜誌八ノ二)

【十三】 朝鮮總督府大正七年度古蹟調査報告書第一冊

參照

【十四】 大正十年十一月實查、此の古墳は臺地の上に營まれた前方後圓墳で、後圓部に箱式棺が存し、内部から立派な三角縁神獸鏡五面が見出されてゐる。

【十五】 同十二年四月十三日調査。塚は丸塚で、中心に一個の竪穴式石室が存し、それに隣つて箱式棺が埋められたもの。棺内に仲展葬の遺骸などは存し、頭邊に近く鐵器四五點を發見した。

【十六】 梅原「上代の南朝鮮に就て」(思想第四號)